彙報

○早稲田大学史学会・連続講演会

「わたしと歴史学、わたしと考古学」

（於文学学術院校舎）

第一回　二〇一〇年六月二二日（火）

歴史を描くという感覚
佐々木　啓（日本史）

モンゴルとイラン世界
―歴史をとおして自分も知る―
高木　小苗（東洋史）

西洋史を学ぶということ
―過去への静かな情熱―
薩摩　真介（西洋史）

社会の動きを読み解く
―エジプト考古学―
山尾　和宏（考古学）

第二回　二〇一〇年六月二九日（火）

わかっちゃいるけどやめられない
―陶酔の中世、中世の陶酔―
下村周太郎（日本史）

汗をかく歴史研究
―「フィールド歴史学」へむかって―
高木　理（東洋史）

むかしのヒト、いまのヒト
―中世スペイン史から―
黒田　祐我（西洋史）

私が考古学を学ぶ理由
山田　琴子（考古学）

趣旨と経過

新川登亀男

二〇一〇年度の早稲田大学史学会連続講演会が、六月二二日（火）と二九日（火）の両日にわたっておこなわれた。共通のタイトルは、「わたしと歴史学、わたしと考古学」である。

この催しは、恒例行事となっている。主に本学両学部（文学部・文化構想学部）の新入生を対象にした企画であり、日本史・東洋史・西洋史・考古学の若手（本当に若い）研究者各二名、総勢八名による歴史学・考古学への招待講座と言ってよい。進級を目前にした彼・彼女らに、歴史学と考古学を勉強する魅力、可能性、必要性を身近なところから語りかけてもらおうというわけである。

恒例行事とは言え、本年度にはとくに感慨深いものがある。なぜなら、二〇〇一年にはじまったこの企画も、今回で十年目を迎えたからである。当初三年間は、熟成した中高年の研究者による連続講演であったが、その後、講演者もいっきに若返り、共通テーマも固定して今日に至っている。

正直言って、これほど長く続くとは思っていなかった。毎年、前年度の連続講演会を振り返りながら、やはり本年度も続けるべきだとの思いを新たにしつつ、現在に至ったのである。言い換えれば、毎年毎年、史学会総がかりで育ててきた企画であり、その期待を裏切らない行事となっている。何よりもうれしいことは、毎年あらたに語り次いでくれる若手研究者たち、残念ながら若手ではなくなっていく研究者たち、そして、その研究の窓口をのぞく機会を得た極めて若い学生たち、これら三者が集う場を

得たことである。短時間ではあるが、三者それぞれの立ち位置を、毎年毎年、様々な意味において想起させてくれるのである。

また、本年度は、新学部体制下ではじめて入学し、かつての連続講演会にも参加してくれたであろう人たちが卒業年次を迎えている。そして、今、あらたに進級しようとしている後輩たちの参加を得て、連続講演会は今年も開かれた。彼・彼女らの関心は、留学に関すること、研究と現代とのかかわり方、大学院進学や就職に関することなど、多岐にわたっている。おおむね、歴史学と考古学の勉強に興味を持てたという反応が返ってきたが、パワーポイントの使用以外に、もっとレジュメを配布してもらいたいとの提言もみられた。進級選択の資料として手許に置いておきたいということらしい。もっともである。

これから、さらに工夫しながら、三者それぞれのために、この行事を続けていきたいと思うことしきりである。

〈第一回〉

歴史を描くという感覚

佐々木 啓

今回は「歴史を描くという感覚」というタイトルでお話しさせていただきます。「感覚」という変な表現にしたのは、今回の講演では、「大上段」で論理的に説明するというよりも、自分の経験をもとに「感覚」的な話をした方がよいと思ったからです。以下、歴史学とはどのようなものなのか、なぜ歴史研究の道に進んだのか、といった二つの「感覚」についてお話しします。

まず、歴史学とはどのようなものなのか、という点について。私の専門は日本近現代史なのですが、特に戦時中の労働力動員について調べています。現在関心を寄せているのは、簡単にいうと①「戦時中、国家は民衆をどのように工場に動員したのか?」という問題と、②「動員された民衆はどのような意識を持って働いていたのか?」という問題です。これらの問いに対する答えを日々考えている、というわけです。

①については、どういう回答が考えられるでしょうか。国家総動員法があった時代ですから、民衆は強制的に動員されて働かされた、というイメージが強いかもしれません。もちろんそれはそれで事実なのですが、しかし、そんなふうに無理矢理連れてこられた人たちが果して一生懸命働くでしょうか? 国家は単に人に強制するだけではなく、何か色んな「しかけ」をつくったのではないか? こういう想定に立って史料を探してみると、意外と色んな「しかけ」が見えてきます。たとえば「歌」です。ここに挙げているのは「増産音頭」のレコードの広告です(『大阪新聞』一九四三年四月二八日付夕刊)。「やりぬけ増産」、「迷利犬、闇愚魯倒すまで!」とあります。大日本産業報国会制定とありますから、国家が率先して「音頭」を作り、社会に普及させることで民衆の間に「増産」への意識を高めようとしたことがわかります。このよう